

イチジク株枯病の新しい農薬 「ICボルドー66D」



イチジク株枯病

薬剤の体系防除例

処理時期	薬剤名
【露地栽培】	
5月	オンリーワンフロアブル2,000倍
7月	トップジンM水和剤500倍
8月	収穫開始 ICボルドー66D2倍
10月	収穫終了 オンリーワンフロアブル2,000倍
【12月加温ハウス栽培】	
1月	トップジンM水和剤500倍
3月	オンリーワンフロアブル2,000倍
4月	トップジンM水和剤500倍
5月	収穫開始 オンリーワンフロアブル2,000倍
7月	ICボルドー66D2倍
8月	収穫終了
9月	オンリーワンフロアブル2,000倍

開発のねらい

昨年度、防除が極めて難しいイチジク株枯病に有効な土壌処理薬剤として、オンリーワンフロアブルを選定しました。しかし、同じ薬剤を使用し続けると耐性菌が発生し、防除効果の低下が心配されます。そこで、別系統の薬剤を選抜し、登録を進めました。

新技術の概要

- ICボルドー66D（2～4倍液5 L／樹、株元灌注処理）は、オンリーワンフロアブル同様、対照薬剤（トップジンM水和剤500倍液1 L／樹）よりも高い予防効果が得られます。
- ICボルドー66D、2倍液の株元灌注処理は、オンリーワンフロアブル同様、トップジンM水和剤よりも長い残効が得られます。
- ICボルドー66Dは、定植1年目に処理すると新梢の生長抑制や激しい場合には枯死するなどの薬害がみられますが、2年目以降の処理ではみられません。

活用場面

体系防除によってイチジク産地での被害軽減につながり、農家所得の向上と、安定供給によるブランド化に役立ちます。